

「異類女房」としての綾波レイ（『新世紀エヴァンゲリオン』）と サン（『もののけ姫』）

秋 田 巖*

Rei Ayanami (Neon Genesis Evangelion) and San (The Princess Mononoke) as “Non-human Wives.”

Iwao Akita

I はじめに

ユング心理学関連の出版物を読み慣れている向きには上記タイトルの意味するところをすぐ受け取っていただけるものと思うが、そうでない方々には少し奇異に感じられるタイトルかもしれない。

まず「異類女房」とは何のことか。このことはⅤ章を読んでいただければわかるとして、こういう捉え方（異類女房としての綾波レイとサン）をすること自体についてのいわば意味付けのためにⅣ章を挟んだ。またそれとの関連で罪悪感とケガレのことに触れた。

また、深層心理学的視点からマンガやアニメが語られることが不思議なことに稀であることを踏まえて、それらを論ずる意味付けとしてⅡ・Ⅲ章を付した。昔話や絵本や子供向けのファンタジー作品が取り上げられることは多いのだが、意外なことにマンガを深層心理学的に扱った論文はごく少数だし、書物としては管見の限りでは皆無である。

Ⅱ～Ⅳ章は以上のような理由で書かれたので、Ⅴ章から読んでいただいてもよいかもしれない。

Ⅱ 「一億人の漫画連鎖」

日本に於ける昨今のマンガやアニメの隆盛ぶりには驚くべきものがあり、今更それについて数字をあげつらう必要はないと思われるが、例えば毎週百万部以上売れているマンガ週刊誌は10誌に及ぶ¹⁾。そのなかでもトップクラスになると四百万部以上という殆ど信じられないような部数が毎週出ている。他の活字本であればいきおいツンドクことになりがちだが、マンガ本がツンドカれることはまずなく、それどころか仲間うちでの回し読みはごく常識的なところである。この共有度の高さは恐るべきことであり、恐れてしかるべきである。『一億人の漫画連鎖：コミックリンク』²⁾という雑誌のような書物が出版されているが、この書名はなかなか象徴的である。1億人とは言わないまでも、実に多くの人々に共有されているマンガやアニメのイメージがこれまた実に多くあることは疑いないことであり、その「リンク」を考えるとマンガ抜きに日本人の心理について語ることはほぼ不可能と言いたくなるほどの状況である。

しかしながらその一方「マンガはレベルの低い娯楽物」であり研究の価値などあるものかとする意見も依然として存在し、筆者の周りにも

* 精神医学，ユング心理学

それはある。しかもそれは陳腐な意見として切り捨てられるべきでない部分を含んでいる。例えば表現の自由度の高さはマンガの誇るべき最大の強みの一つであり、それがマンガの「神話化」や「昔話化」につながっていくのであるが、その自由度をギリギリまで保ちつつしかも無節操に墮さないためにはすさまじい能力が書き手に要求される。そしてその高い自由度を使いこなすことの出来るマンガ作家はそう多くないかもしれない。或は過度の商業主義の問題や、若年にして燃え尽きてしまうマンガ家が少なくないこと等々問題点も多々ある。

しかし、にもかかわらず素晴らしい作品が夥しいまでに存在するのであり、日本を代表する知性にもその価値が徐々に受け入れられつつある。ごく一例を紹介すると、作家の北杜夫は一足早く昭和30年代には既にマンガを大いに賞賛しているし、フランス文学の桑原武夫は晩年「自分は漫画を読む癖を身に付けなかった。それが残念だ」と語ったと言う³⁾。「徐々に受け入れられつつある」と書いたが、同じくレベルの低い娯楽物として扱われた、当時の王朝文学や浮世絵と比べると寧ろかなりのスピードで、いわゆる知識層にも受容されつつある。ともあれマンガのこの圧倒的浸透度を考えると personal なレベルのみならず日本人の collectivity にまで影響が及ぶことは明らかであり、日本人の深層を語る時、実に注目すべき媒体であることは疑いない。

中村真一郎がどこかで「王朝文学に比肩できるものももしあるとすれば19世紀のロシア文学ぐらいのものである」という意のことを述べていたが、現代日本のマンガ文化もそれに劣らぬ可能性を秘めていると感じられる。ちなみに中村はマンガ文化に対して否定的である。公平のために一部引用しておく。「現今、劇画が世界

的隆盛を誇っているが、あの形式がドストエフスキーの人間の魂の地獄の深みや、ジョージ・エイオットの人類の理想への希求への高みを乗り越すに至らないだろうこと、それはかつてわが中世のお伽草子が到底『源氏物語』の精密さや、『我身にたどる姫君』の残酷さを凌駕するに至らなかった先例にならうことは、その形式自体の制約が予見させてくれる。」⁴⁾

III 『新世紀エヴァンゲリオン』と『もののけ姫』

さて、この2作品の大ヒットは記憶に新しいところである。前者は'95年からテレビアニメとして放映が始まり'96年に約半年の放映が終了したのだが、むしろ放映終了後、物語にちりばめられた謎の数々に興味が集まり一般マスコミも取り上げるほどの大ブームとなった。アニメをもとにしたマンガ単行本も現在4巻まで刊行されており、'97年10月時点で650万部以上出ている。関連商品の売れ行きも驚異的だという⁵⁾。片や『もののけ姫』は'97年7月12日に公開されたのち日本映画史上最高（それもダントツ）の配給収益を記録し、'98年2月現在いまだロングランが続いている。売り上げだけでなく両作品とも、意見百出ではあるが総じて高い評価を得ており、マンガ・アニメ史上に残る作品であることはまず間違いない（『もののけ姫』は第21回日本アカデミー賞作品賞を受賞した）。であるからそれらを論じたものも数多い。例えば『別冊宝島330アニメの見方が変わる本』の「新世紀エヴァンゲリオンはいかに語られたか」という特集記事をみると、10ページにわたり多くの「文献」の紹介がなされたあと「…ただし新世紀エヴァンゲリオンに関する雑誌・新聞記事、関連書籍の量は膨大ですので、本項に

取り上げているのは、それらのうちの一部であることをお断りしておきます」⁶⁾とある。『もののけ姫』関連の「文献」もそれ程ではないにしろ多数出回っている。それゆえそのすべてに目を通す余裕はとてもないが、目に留まった範囲では、この2作品を「セット」として深層心理学的に論じたものは見当たらない。そこで本小論では或る一つの視点を持ってこれら2作品を見直してみたい。といっても2作品の内容分析をするのではなく、それぞれのヒロイン「綾波レイ」と「サン」のイメージに焦点を絞って述べる。

この2作品は言うまでもなくそれぞれ別の独立した作品であるのだが、筆者にはこの2作品の同時期の大ヒットは単なる偶然以上のものを含んでいると感じられる。さらに言えば、日本が歴史的に持っている深層心理学的課題の一つの表現としてみるができると思われるのである。日本が歴史的に持っている深層心理学的課題とは、別の言い方をすれば、日本人全体の歴史的個性化と言うことを考えた場合そのプロセスの中に深層心理学的課題が含まれているということである。

深層心理学的に人間の心を語る場合、出来る限りその源流にまで遡る努力が必要であることは当然である。個人の深層を知る上でその両親、そのまた両親と遡ることがぜひ必要であるのと同様に、日本人の深層を考える時にも能う限り歴史的な大きな流れの中で捉える努力が必要となる。といっても勿論、歴史上の諸事項をこまごまと取り上げるのではなく、いわば深層心理学的歴史的態度のことである。つまり日本人の深層において連綿と流れ続けている課題に注目する態度の必要なことをまず言っておきたい。現代の諸問題を語る時、ぜひ必要な視点であるにもかかわらず驚くほど欠落しがちである

からである。

しかしながらその深層における流れはいくつもあり、またそのいくつかの流れが合流したり分れたり交わったり或は重層的であったりと様々な動きを示すので確たることを言うのが難しいのだが、本小論では「異類女房」をキーワードとして取り上げ論点を固定する。しかしその前に現代日本の心理学的状況についての私見を少し述べておく。

IV 日本人の現在

1. 正念場としての現在

どちらを向いても暗い話題ばかりで、特に心理学の分野では不登校やいじめの増加、或は凶悪犯罪の若年化などが大きな話題となっている。確かにこれらは憂慮すべき大問題であるが、こういった報道がなされるたびに念頭に浮かぶのは戦時下における自殺率の極端な低下である。つまり心理学の分野で問題とされるような事態の増加には「平和」の代償の側面がある。生物学的安全度が高くなればなるほど、より本質的な問題に取り組まざるを得なくなる側面を人間は有している。

作家の井沢元彦が面白い言い方をしている：「衣食足りてケガレを嫌う」⁷⁾。井沢は衣食が足りた現代、日本人にとっての本質的な課題の一つであるケガレのことが社会現象化してきているというのである。ケガレのことにはまた後で少し触れるが、現代においては「衣食が足りている」ことをまず忘れてはならない。生物として外的に追い求めなければならないものが減少した現代、そのぶん行為の自由度が高まっておりその自由をどう使うかは個々に任されている。これは素晴らしいことであり恐ろしいことである。なぜ恐ろしいかといえば小人は閑居す

れば不善をなすのであり、そして人間の殆ど全員が小人だからである。言い換えれば人間の自我はほんの少しの自由しかコントロールできない。

現代は心理学的本性が表現されやすい時代である。出来ようが出来まいが人間存在としてより本質的な課題に向き合わざるをえない、或はその余裕を与えられた時代である。人間としての正念場を迎えていると感じられる。

例えばどういう現象が生じているか、罪悪感のことにに関して少し述べる。

2. 「罪」なき衆生は度し難し

が実は、京都文教心理臨床センターの紀要創刊準備号がこの春刊行予定であり、筆者もその特集「心理臨床と文化」の座談会での発言をもとに、「個性化におけるcollectivityとindividuality 試論 — 「罪」と個性化 —」という小論を提出させていただき、そこで西洋における原罪イメージの共有、そのcompensation（補償）としての個性尊重、そしてそれとかなり趣を異にする日本人の罪意識について述べた。罪悪感のことを述べるためにまずその線上に乗りながら話をすすめる。

「縁なき衆生は度し難し」という言い方があるが、個性化(individuation)ということを考えて場合、「罪」なくしては展開のしようがないという側面があると筆者は考えている。ところで本紀要は心理学の専門誌ではないので「個性化」のことを少し説明しておく。

個性化とはJung, C. G. (1875-1961) が彼の分析論において重視した概念である。Jungは分析心理学(analytical psychology; 日本ではユング心理学Jungian psychologyと呼ばれることが多い)の創始者として知られ、その治療において夢や絵画や能動的想像などを用い、

その治療プロセスのなかでクライアントが「個人の神話」を紡ぎあげていく過程を個性化の過程と呼んだ。これはまた様々に説明されるが、例えば病的症状のある人が健康になっていく過程や、大きな問題を抱えて四面楚歌の人がそれを克服していく過程のなかで、寧ろその苦しみがバネとなって、より自分本来のものに根づいた生き方が始まっていくプロセス、という言い方も出来る。そしてまことに皮肉なことだが通常の人間の場合そのような大きなnegativeなしではなかなか自己の人生に対する深い肯定感が生じにくい側面があるように思われる。

本節のタイトルを「罪」なき衆生は度し難しなどと付したのもそこところと関係がある。また、罪をカッコで括って用いているのは、人生における実に様々なnegativeをこの言葉で象徴させたいからである。個性化するものが否応無しに始めさせられる、運命的とも言える通常はnegativeな何物かとの出会い、それを罪という言葉に託して使っている。

昔話ことに西洋の昔話をみると様々な「禁破り」に会う。そしてその後が続く主人公の苦難。しかしそれは大いなる幕開けの序章でもある。母親の経営する会社に勤めていた或るクライアントが「これから実は自分で事業を始めたい。是非やってみたい仕事がある。しかし本音を言えば、母の支配下から逃げ出したいだけなのかもしれない」と言われた。これなどは継母に家を追い出されるパターンの昔話が背後に存在する感じがする。禁を破って苦難を背負ったり、「継母」に追い出されたり、病気になったり離婚したり、そういった様々な‘negative’を「罪」という言葉に託している。

神話にはその個性化のいわば引き金がもっとダイレクトに罪そのもので表現されている。聖書にしろエデンの園の真ん中にある木の実を食

べなければ、その後の大いなるストーリーは展開していかない。個性化において「罪」は極めて重要な一要素なのである。

ところがこの根源的なところに亀裂が生じつつある。

3. 罪悪「感」喪失の時代

或る若い女性のクライアントが「上司が不倫を仕掛けてくる。誘われること自体いやだがそれより更に腹が立つのは、奥さんに対しても私に対しても罪悪感を全く感じていないことだ」と言われた。罪悪感を本当に感じていないかどうかは分かりにくいことで、また罪悪感を持てばいいというものではないが、葛藤なきところに個性化はない。「罪」が単なる negative で終わるかどうか罪悪「感」は大きくかわってくる。また、ある過食症のクライアントが「食べ過ぎのままだと理想の自分に対して罪悪感を感じて苦しい。過食をしても吐いてしまえば罪悪感を感じずにすむ」と言われた。しかしある時期から「苦しくても（罪悪感を感じても）吐かないことにした」と言われ始め、次第に過食を克服していった。罪悪感を切り捨てるのはラクだが、それでは個性化につながらない。

どこかしこを見るにつけ、現代の一つの特徴は罪悪「感」の抑圧ないし喪失ではないかと思えてくる。日本人の昨今の行動にそれを強く感じるし、罪の宗教的側面を持つキリスト教の不人気からすれば、もっと広範囲の現象なのかもしれない。罪悪感が人間の根源にかかわるものであるとすればこれらはゆゆしき事態である。

しかしついでに述べれば、それと入れ替わるように浮上してきたのが日本を特徴づける概念の一つである「ケガレ」の問題である。それは例えば抗菌グッズや消臭グッズの氾濫つまりは極端な清潔志向（「穢」の排除）という現象と

して浮上してきている。

このことはまた別のところでまとめて述べるつもりであるが、ことほどさように、筆者は日本の現在を、本質的課題が浮き彫りにされやすい時代と捉えている。

V 「異類女房」としての綾波レイとサン

1. disappearing animaとしてのレイ

抗菌グッズどころではなかった時代を通り抜けて今ケガレの問題が前面に浮上する余裕が与えられた。「穢の排除」という現象が日本を特徴づける重要なものの一つであるなら、我々は是非このことと真剣に向き合わなければならない。そしてそれに勝るとも劣らぬ課題が『新世紀エヴァンゲリオン』と『もののけ姫』に内包されているように感じられる。

『新世紀エヴァンゲリオン』の女性主人公綾波レイ（図1）。彼女の人気は大変なもので、多くの関連商品（人形、ポスターなど）が発売されよく売れている。なかでも数十万円もする等身大の人形の発売は彼女の人気を象徴している。この高価な人形がなかなかの

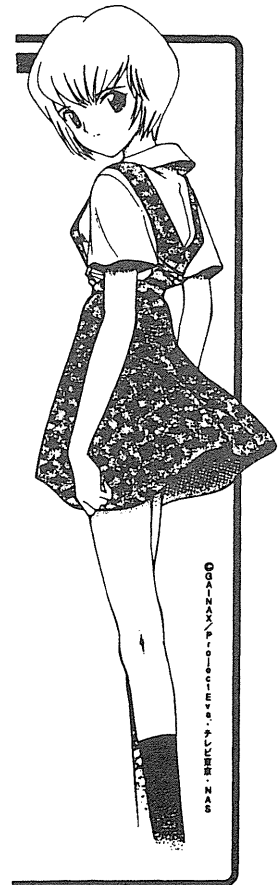


図1 ©GAINAX/Project Eva.
テレビ東京・NAS

気で一時は生産が追いつかないほどだったという。

捉えどころのない不思議な魅力。「あどけないうというよりはすべてを知って醒めているようで … 手の届かぬ少女像」⁸⁾。細くしなやかな線で描かれたこの美少女は触れると崩れ落ちてしまいそんな弱々しさと存在の不確かさを感じさせると共に、何かに裏打ちされた確かな存在感をもまた同時に併せ持つ。これはおそらくは、とても重要なメッセージを秘めた存在として描かれていることに拠る。そのメッセージ性ゆえに、疑いようのない確たる生きる目的を持った（或は持たされた）存在。このことはしかし自らの生に自我の関与が許されない存在であることをも意味する。元型レベル（のみ）での生を余儀なくされている存在。自らの生に対する自我の関与の稀少さの方に感情移入すれば、いかにもはかない弱々しい存在とうつつるだろうし、realize すべき確たる神話をもって生きている存在であることに注目すれば、読者は存在の確かさを感じるであろう。

この特異な女性像は日本人を考える上で極めて重要なイメージである。そしてこのイメージの原型（prototype）を求めれば日本の物語に登場する「消えゆく女性」たちに辿り着く。ところでいきなり「消えゆく女性」ではわかりにくいかもしれないので少し補足する。

関は『日本昔話大成』⁹⁾ の話型110から119までを「婚姻・異類女房」としてまとめている（表1）。表のごとくこの話型の多くにおいて結婚状態は長続きせず妻（異類女房）は去っていく。日本人にとってのこの話型の重要性については1982年に既に河合が指摘しており¹⁰⁾、筆者も少し違う視点から素描したことがある。なぜ重要か、どう重要かについてここでもっと詳しく述べるべきなのだろうが、それをすると大

表1：婚姻・異類女房

大成番号	話型	離婚(去る)
110	蛇女房	+
111	蛙女房	+
112	蛤女房	+
113 A	魚女房	+, -
113 B	魚女房	+, -
114	竜宮女房	+, -
115	鶴女房	+
116 A	狐女房・聴耳型	+
116 B	狐女房・一人女房型	+
116 C	狐女房・二人女房型	+
117	猫女房	-
118	天人女房	+, -
119	笛吹聲	-

変長くなるので、また、まとまった形で発表するつもりであるので、結論だけ一言で言うと、これら消えゆく女性たちのイメージは日本人の魂に深くかかわるイメージであると筆者は考えている。『竹取物語』のかぐや姫や鶴女房は日本人男性のアニマイメージを考えるうえで重要なものであるのみならず、日本人の魂ということを考える時、男女の別を超えて重要なものだと考えている。

ところで異類女房譚における異類女房を二つのグループに分類することが出来る。一つは竜宮女房・天人女房など神性を秘めた女性像のグループであり、もう一つは蛇女房・蛙女房・蛤女房などの「低い」存在の女房たちのグループである。異類女房譚の構造は、異類が人間の女性となって男と結婚し、男が「見るなの禁」を破るなどして破局を迎え、女房は異類に戻って去っていくというものである。この2つのグループは共にこの同じ構造をとってはいるが、これら2群では女房の感じが随分異なる。一方は高きにいます神性を秘めた存在であり、片方はどこか貶められた低い存在である。ここでは前者

を disappearing anima と呼び、後者を動物女房と呼ぶことにする。(ヨコ文字など使わなくてもよさそうなものだがどうも適当な訳語がみつからない。animaには「(男の中の) 女性像」と「魂」という2つの意味があるのでひとつの日本語にまとめることが難しい。アニメとカタカナを使えばいいようなものだが「消えゆくアニメ」ではどうも感じが出ないので今のところ横文字のまま使うことにしている。)

そしてこの「綾波レイ」も筆者は disappearing anima の系譜として捉えている。松本零士が『新竹取物語 — 1000年女王』という作品を描いているが、かぐや姫以来千年にも渡って連綿と続いている disappearing anima の系譜の一つとみている。前述の如きレイのイメージや物語の終盤に示されるレイの神性を鑑みればさほど無理な発想ではないだろう。

現代に於いても、『1000年女王』のみならず多くのマンガ家が、意識的或は無意識的にこのイメージに取り組んでいる。現在連載中のもに限っても、『輝夜姫』(清水玲子)、『妖しのセレス』(渡瀬悠宇)、『天は赤い河のほとり』(篠原千絵)等々、このテーマが前面に出ているものから内包されているものまで含めると多数見出すことが出来る。そしてそれらにはなかなかの傑作が多い。ちなみに『妖しのセレス』は小学館のマンガ賞(少女マンガ部門)を受賞している。

また有名なところでは、同じく松本零士の『銀河鉄道999』のメーテル(図2)、『宇宙戦艦ヤマト』のスターシア(図3)なども、その線上にある。また、彼の描く女性像は極めて似通っている。もっと違った女性像も技術的には描けるに決まっているが、それでもこの女性像を描き続けている。

どうしてこのような現象が生じるのか。この

問題が日本人にとって極めて本質的なものであるため、表現が深くなるとこのテーマに接触せ

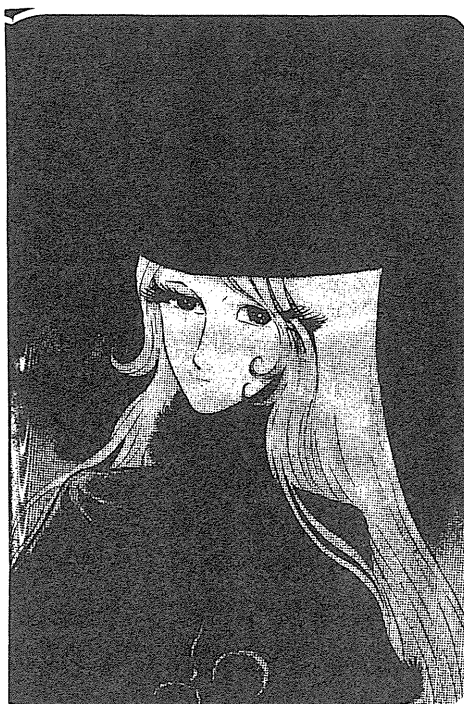


図2 ©松本零士



図3 ©松本零士

ざるを得ない面があることが一つ考えられる。そして現代が本質的な課題が浮き彫りにされやすい時であること。さらに多分、最も重要な理由として、特に第二次大戦後顕著となった、深層における disappearing anima archetype と romantic love archetype のせめぎあいの問題があると思われる。その中から何を生み出していくのか、これは本当に大きな課題である。

2. 動物女房としてのサン

a. 犬神女房

さて、一方のサン（もののけ姫）（図4）。人間に捨てられ山犬に育てられた少女。主人公の男性（アシタカ）と一時期のみ共に過ごし、戦いに敗れやがて森に消えて行く。彼女を動物女房それも「犬神女房」としてみることは不可能

だろうか。人と交わらず、山犬と行動を共にし、文明化に抵抗するサン。人間であることを否定するかのようなペイントを施し、牙を思わすネックレスを身につけ、山犬になり切ろうとするサンは恰も犬神に取りつかれたかのように見える。同じ異類女房でありながら、disappearing anima のようなはかなさを感じさせるのではなく、むしろ通常以上に強い生命力、動物的生命力を感じさせる。

面白いことに、こちらの方のイメージ（犬神）も現代マンガ家のよくするところであり、『犬神』（外園昌也）、『犬夜叉』（高橋留美子）、『神の犬』（谷口ジロー）などが連載中である。

b. 動物憑き

19世紀前半以後は稀な病態となったが、西洋中世における精神の病態の主流を占めたものの

一つに悪魔憑き（demonomania）がある¹¹⁾。一方日本における憑き物妄想の主体を占めるものは動物妄想で、狐つき・犬神つき・蛇つきなどが多い。西洋における悪魔つきはおそらくは、長く強く「神」によって貶められ抑圧され続けたことに原因を求むべきであろう。極めて内向的な人の隠された外向性が時としてやや不自然な形で表現されるように、強い抑圧を受けると妙な形で前面に出てくる。

そうすると日本の動物つきはどう考えればよいか。筆者はdisappearing anima による抑圧を考えている。西洋において「悪魔」が「神」に抑圧を受け続けたように、日本においては「動物女房」が“disappearing anima”に抑圧され続けていると考えている。

Jung はキリスト教の父・子・聖霊の三位一体に対して、それに第4番目の要



図4 ©二馬力 TNDG

素を加える必要を言った。Jung は「悪魔」やその当時貶められがちだった「女性性」をその第4要素として、一見完成性の高い trinity に加える必要性を言った。それでは日本における第4要素は何だろうか。「動物女房」の意味するものは幾つかあるのだが、罪とケガレのことを述べた流れに添いここでは「穢」との関連で述べる。動物女房は低い存在であるのみならず、蛇女房・蛙女房などに「穢なさ」を感じるのは今も昔も変わらないだろう。また、「蛤女房」などは食べ物に小便をかけているところを夫に見られ追い出されてしまう。これなどにも「穢」の排除の意味合いを感じる。実は蛤女房はおいしい味を出すために自らの「小便」を使っているものであり、「小便」なしの食事はさぞかし味気ないものになるだろう。

日本の「第4要素」として「穢」を考える視点を提出したい。西洋において「悪魔」^{サイキ}を心に布置させることが難しくはあるが重要であるのと同様に、日本においては「穢」を取り入れる作業が重要であると思われる。

VI おわりに

“disappearing anima”と「動物女房」は補償関係にある。

disappearing anima のみが布置された時、それは「けうら」（清さ、美しさ）に傾きすぎる。今の状況で言えば抗菌グッズ、消臭グッズの氾濫につながる。それは是非ともバランスを取られなければならない。この意味で、また本論で述べた意味で、『新世紀エヴァンゲリオン』と『もののけ姫』の同時期の大ヒットはまことに興味深く感じられる。

日本に於いては山陰の狐つき・土佐の犬神つきなどが有名であるが両者とも最近鳴りをひそ

めている。山陰の狐つきは「昭和40年代の初頭を境に山陰地方の狐憑き精神病がほぼ完全に消えたことは当地の精神科医が等しく認めている」¹²⁾。科学の席捲に伴う「俗信」の衰えにより「憑きもの」は消えつつある。しかし問題がその民族にとって本質的なものであればそう簡単に消失してしまうものではない。『新世紀エヴァンゲリオン』『もののけ姫』に終わらず、今後とも現われ続けるであろう。

- 1) Shiraishi, S. S., 'Japan's Soft Power : Dorae-mon Goes Overseas,' in Network Power : Japan and Asia, edited by Katzenstein, P. J. and Shiraishi, T., Cornell University Press, Ithaca and London, 250, 1997
- 2) ダ・ヴィンチ編集部編, 1億人の漫画連鎖: コミックリンク, メディアファクトリー, 東京, 1998
- 3) 鶴見俊輔編, 日本人のこころ, 岩波書店, 東京, 116, 1997
- 4) 中村真一郎, 王朝物語, 潮出版社, 東京, 18, 1993
- 5) 夏目房之介, マンガと「戦争」, 講談社, 東京, 164, 1997
- 6) 別冊宝島330, アニメの見方が変わる本, 宝島社, 東京, 265, 1997
- 7) 井沢元彦, 逆説の日本史4 ケガレ思想と差別の謎, 小学館, 東京, 304, 1996
- 8) 別冊宝島349, 空想美少女読本, 宝島社, 東京, 180, 1997
- 9) 関敬吾編, 日本昔話大成全12巻, 角川書店, 東京, 1978-80
- 10) 河合隼雄, 昔話と日本人の心, 岩波書店, 東京, 1982
- 11) 加藤正明他編, 新版精神医学事典, 弘文堂, 東京, 4, 1993
- 12) 福岡悦夫, 山陰地方の狐憑き, 精神医学40(3), 234, 1998

Rei Ayanami (Neon Genesis Evangelion) and San (The Princess Mononoke) as “Non-human Wives.”

Iwao Akita

Abstract

Great success of “Neon Genesis Evangelion” and “The Princess *Mononoke*” in 1997 are fresh in our memories. I found these simultaneous great hits more than a mere accident, and have submitted to the viewpoint of looking upon these heroines as “Non-human Wives”; *Rei Ayanami* as a “Disappearing Anima” and *San* as an “Animal Wife.” The slender, delicate and frail looking image of this beautiful girl *Rei* is a historically important image for the Japanese ; as the inner female image held by Japanese men, and as the soul or the God image of both men and women. And, this image goes back to Princess *Kaguya* in *Taketori Monogatari*. We have a long history of “The Disappearing Anima” repressing “Animal Wives,” just as demons and devils have been repressed by the Christian God. Interestingly enough, we have “Animal-possession” such as fox-possession, snake-possession and dog(god)-possession rather than demonomania in the West. One of the features of modern Japan may be the over exclusion of “*E*” — uncleanness, impurity or defilement — and this is expressed as the flood of goods for the removal of odors and the antibacterial products. “The Disappearing Anima” always exists on a pedestal. The divinity being enshrined. Whereas the “Animal Wives” have been looked down upon and exist in a low place. The relationship of these two different “Non-human Wives” may be thought to represent the mentality of excluding “*E*.”